

卒業論文

# 感染症予防における情報共有システムの開発

Development of Information Sharing System for Infection Control  
Team (IS-ICT)

提出日

2013年1月29日

指導教授

齋藤 正武 准教授

中央大学商学部

学科	金融学科
学籍番号	09C4166015B
氏名	酒井 亘

## 感染症予防における情報共有システムの開発

### Development of Information Sharing System for Infection Control Team (IS-ICT)

酒井亘

齋藤正武ゼミ

病院や診療所など医療施設が抱える課題の一つに院内感染がある。院内感染とは医療施設で入院患者もしくは医療従事者が、人や医療器具を通して細菌やウイルスなどの微生物に感染することをいう。院内感染が集団感染となると病院全体に広がり多くの被害が出る。院内感染は病院経営だけでなく患者の命まで危険に及ぶ。近年の事例で、数名から数十名の患者が院内感染の被害にあっている。

病院ではこうした院内感染の対策を行うために感染制御部が存在する。この部署では感染対策の啓蒙、病原体の蔓延予防や検出、感染症発生時の対応などを行っている。そして重要な業務の一つに担当の医療従事者への感染症の情報連絡・共有がある。病院内の集団感染は時間が経過すればするほど被害が広がるため感染症が発生した場合医師や看護師にすぐ連絡を行わなければならない。しかし医療従事者間での情報共有は、週に1回ある程度で、迅速に連絡ができる体制になっていない。この問題を解決するためには情報技術(IT)を用いて情報共有のシステム化を行うことが望ましい。本研究では獨協医科大学の感染制御センターをモデルに情報共有のためのシステム化を行った。システム化を行うに当たり医療現場で導入が進んでいる iPad をベースに開発を行った。

感染制御センターの問題点調査した結果以下の問題点が見つかった。1つ目は「情報管理」である。感染に関わる重要な情報を早急に連絡する場合や、過去の情報を探する場合に現状では困難である。2つ目は「情報の可視化」である。感染症の患者がどの病棟にいるのか分かりづらく視覚的に分かりやすくする必要がある。3つ目は「意見交換」である。感染症の情報には患者を直接診ている看護師をはじめとするほかの医療従事者の意見も取り入れる必要がある。以上3つの問題点を解決するようなシステムの仕様とした。

獨協医科大学病院の感染制御センターで実装したシステムの有効性を確かめた結果、改善の余地はあるものの、業務におけるシステムの要求度は高い結果が得られた。今後の課題として挙げられるのは「システムの構造」、「情報の整備」、「使いやすさ」である。これら課題を解決し、感染対策のツールとして利用できることを強く望む。

医療情報システムには様々な分野がある。本研究は其中で病院情報システムに該当する分野である。加えて、他のベンダーが提供するシステムと比較して、価格面で優位性が高い。